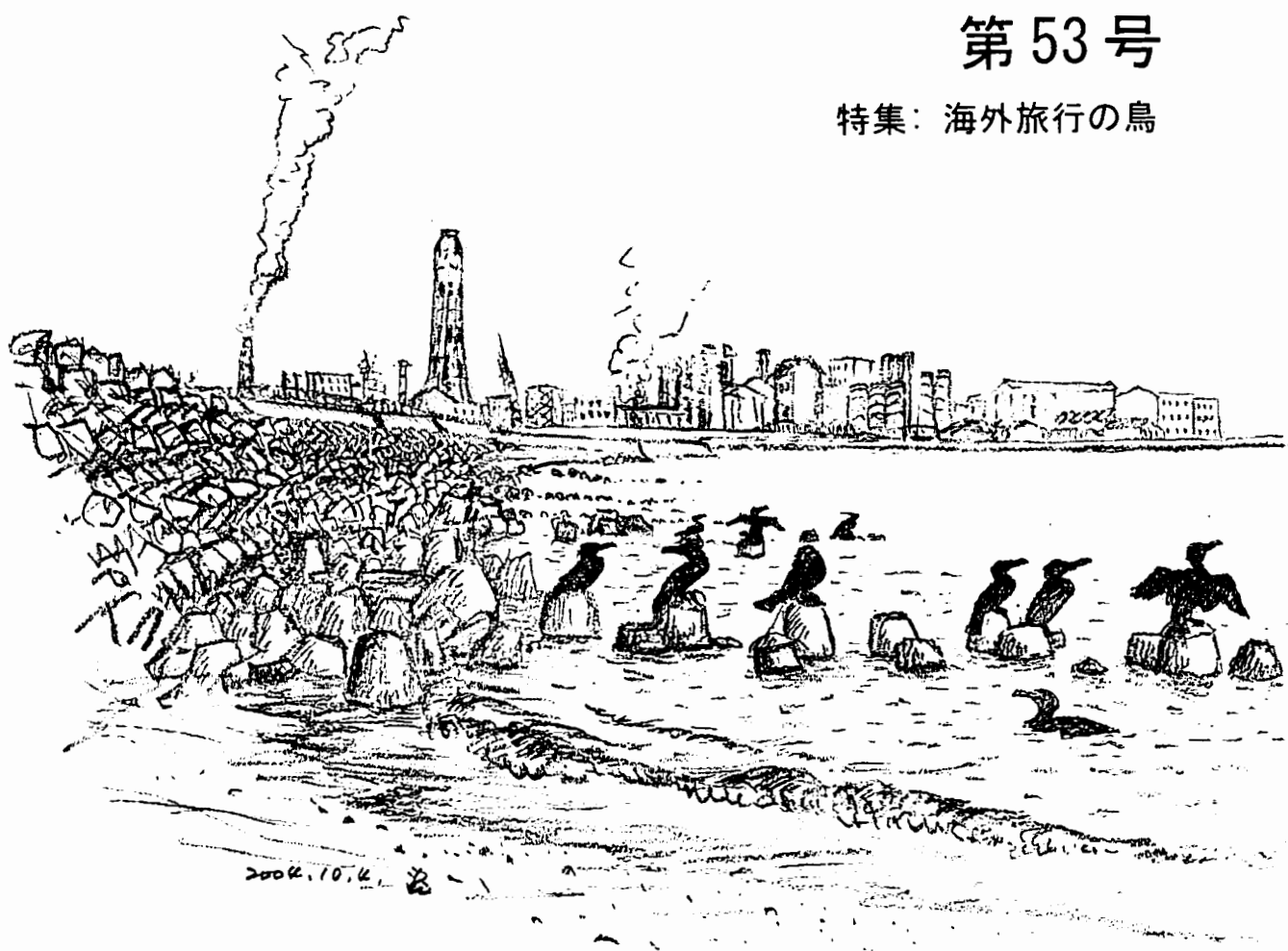


しごき

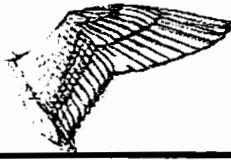
第53号

特集：海外旅行の鳥



2007年 1月 日本野鳥の会 三重県支部

<http://www.amigo2.ne.jp/~miebirds/>



これって異変って言えへんかな

前澤昭彦 (伊賀市)

10月に入って、日本の各地でツキノワグマが住宅地や農耕地に出没して、被害を与えるというニュースをよく耳にした。それらのニュースの主張は、この事実を伝えることと共に、クマと人間の生活域の境界線が崩れかけてきているのではないかというものであった。こういったいろいろな自然にまつわる事象が異変とか気象変動とかとの

関連で騒がれるようになってきた。それだけ、人は気候変動に興味関心が出てきた証拠なのである。

私は、この10月に入って野鳥の動きを見ているといろいろとこれまで観察したことのないような行動に出くわしたりして、世間の人と同じに異変とか異常気象とかを疑ってしまいたくなる。また、少し不気味にも思う。日頃から野鳥に関心を抱き、観察をしている会員の皆様はどうだろうか。

私の家の庭に2本ずつ温州ミカンとユズの木が2本植わっている。毎年カイガラムシと闘いながら、たくさんの実をつける。2本の木で、一冬、ミカンを買う必要がないほどに収穫出来、欲しいときにもぎ取り、家族で食べている。寒い冬には、毎晩ゆず湯に浸かれるほどユズも多産だ。

これまで、ミカンを横に半分切って、餌台へ置くとすぐにヒヨドリが餌付き、2月下旬まではその中身だけを食べ、それ以降は、皮の部分も食べてしまう。ヒヨドリがミカンの皮にまで手(口)を出すのは厳寒期をこえたくらいからだ。その光景を見て、よほど餌がないのだろうと思ったものだ。

この厳寒期の時期のヒヨドリは畑の白菜からほうれん草まで食べる。群れで飛来し、電線から降り立ち、青菜をつつく。しばらくすると、また、電線にとまり、また降下して、つづく。こんな

目次

表紙の言葉.....2

巻頭エッセイ.....2

特集：海外旅行の鳥

 特集にあたって.....4

 カムチャッカ紀行・ついでに鳥見.....4

 「ドロミティ・アルプス」の鳥たち.....6

 海外の鳥 (中米コスタリカ).....8

 オーストラリアの野鳥.....9

 北の島シェトランドの鳥.....11

会員のページ

 探鳥の会に参加.....14

 白塚町屋探鳥会に参加して.....14

今日も鳥日和.....15

アートギャラリー.....16

調査・研究のページ

 鳥羽行者山タカ渡り調査結果.....17

 2006年シロチドリ繁殖調査.....18

 横山池調査結果.....19

 伊賀地区調査結果.....21

 笹子谷林道調査結果.....23

 鈴鹿川・鈴鹿川派川調査結果.....24

野鳥記録.....26

支部活動のページ.....28

探鳥会報告.....29

編集部よりのお知らせ.....32

編集後記.....32

表紙の言葉

カワウ

鹿島素子 (四日市市)

鈴鹿川河口右岸先端から右手に、長さ500mにも満たない僅かな砂浜が、細いテープのように残されている。ここは人が入らず、テトラポットが、カワウや時には旅鳥達の絶好のお休み所となっている。

海を眺め、羽を乾かし、潮時を待っている彼等は、明日をどうしたものかなど、つまらない杞憂とは無縁の世界に住んでいる。そんな彼等に憧れる。



光景を観察された方も多はず。私はこの光景を初めて見たとき、「えっ、ヒヨドリも野菜食べるのお」とびっくりした記憶がある。たぶん20年以上前の話のように思うが……。当時、ある本を見るとかなり有名な鳥類学者談として「昔は（この昔とはいつのことか忘れた 筆者注）こんな光景は全く見られなかった。」との記述があったので、ほうれん草を食べる行動は、大昔から連続と続いている行動ではないような印象を受けた。

さて、私の家に来るヒヨドリのことに話を戻す。鈴なりになったミカンを狙って、今年（2006年）はヒヨドリがもうやってきた。まだ、ミカンの皮を突っついて、食べるというところまでには至っていない。昨シーズン（2006年）は2月下旬に、なっているミカンを直接、突っついて食べ始めた。ヘタの部分を丸く残して、身も皮もすっかりと食べてしまっていた。食べ残したヘタが白く見えて、ミカンの木に星の飾り付けをしたようにも見えた。例年なら、この時期まで、ミカンにヒヨドリが寄りつくことはなかった。今年（2006年）はまだ11月の中旬なのに、ヒヨドリがもうミカンを狙っている。野や山では、もう餌が不足しているのだろうか。それとも、昨シーズン、ミカンの味を知った同じ個体が今年は早々から狙いだしたのか。それなら、実際に食べてもいいのだが。その辺はよく分からない。

2006年の5月6月のブルーベリーの収穫の頃も、ヒヨドリがやってきた。早起きしてよく熟れた実をヒヨドリと競争して採った。こんなことってワイルドでアウトドア的でいいものだなと思ったりもした。（実は、このヒヨドリは不幸なことに母親が張った防鳥網に引っかかって、死んでしまった。）

ところが、今年はいった食べた・食べられたの話がヒヨドリだけではおさまらなくなった。カラスだ。特にハシボソガラスが畑の白菜を食べ始めた。父が、最近目撃したそうだ。「そんなことはあり得ない」と私は言ったものの、父は「白菜だけではなく、ネギまで食べている。」と。この光景、私は実際に見ていない。ひょっとすると白菜についているアオムシを捕っていたという可能性もある。昨年のこと畑にある生ゴミ用の緑の

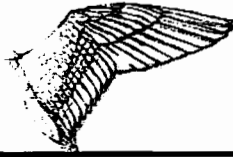
コンポスト用ポットの中で、ウジ虫が発生し、それが外へ出てきて、ポットの外側はウジ虫がいっぱいついていたことがあった。めざとく10羽ほどのカラスがこれを見つけて、食べ始めた。三月の中旬頃、少し春めいてきた頃だと記憶している。「何でカラスが生ゴミポットにまとわりついているの。」素朴な疑問で、実際にそこへ行って見て、問題は解決した。カラスもウジ虫を食べなければならないほど落ちぶれたのか。変な同情をしてしまった。

そんなことが私の近くで起こっていて、特に今まで気にもとめなかったカラスについて、関心を持つようになってきた。

ミヤマガラス。まだ三重県では記録がない。ところが最近全国的にこのカラスが生息範囲を広めているという。1980年代までは主に九州で見られ、他の地域ではめったに見られないカラスであった。ところがそれ以降どんどん分布を広げ、2000年の前半には三重県、奈良県、和歌山県、東京都、山梨県以外で観察されるようになってきた。三重県では、まだ未記録種であるかもしれないが、愛知県では最近記録があるそうだ。ミヤマガラスの分布について、注意して観察する必要が出てきた。このことは文一総合出版の『バーダー』12月号に詳しく載っている。この雑誌によると『中国で餌不足になって日本に多数飛来するよう



リンドウ



巻頭エッセイ・特集：海外旅行の鳥

になった。』とか『中国で数が増えて、日本へもやってきた。』等その理由と考えられるものがあげられている。NPOバードリサーチのホームページにも詳しい。今、この鳥の初認記録をホームページ上で募集している。これまでの初認記録を見ると、ミヤマガラスはいったん九州地方へ飛来し、その後、各地へ分布を広げているのではなく、大陸から直接日本各地に飛来すると考えた方が適切であることをしめす記録が集まっているという。

今後、カラスを見たら、「ハシブトか」「ハシボソか」だけでなく、「ミヤマか」も気をつけて観察していくことになりそうだ。

あれも異変、これも異変とはなってほしくないが、日頃の会員の皆様の観察ノートではこういった野鳥の異常な(?)行動に関する記録はどうか。そのうち「野生鳥類異常行動調査〇〇」なんていう研究団体が結成されたりするかもしれません。

特集「海外旅行の鳥」にあたって

編集部

言葉の壁があるとはいえ、以前に比べ格段に身近になった海外旅行。多くの支部会員が胸を躍らせながら、飛行機に、あるいは船に乗り込んでいます。そのいくつかを紹介します。その胸の高鳴りを感じてください。これまで海外へ出かけていなかった支部会員も今度計画してみたいかがですか？(何だか旅行会社の宣伝文になってしまいました)



エトピリカ

カムチャッカ紀行・ついでにの鳥見

真田ちか(四日市市)

H・18年、7月2日 その日は心待ちにしていた「秘境千島列島・カムチャッカクルーズ」の旅の始まりであった。探鳥ツアーでは無いけれど、北の珍しい鳥達に出会えるのでは〜と思うと、心が躍った。船は横浜港を夕刻出港、すべて船内泊、12日間の行程である。

2日目、仙台沖にさしかかる。するとオオミズナギドリの群れ、伴走するかの如く次々と現れるフルマカモメ、ハシボソミズナギドリ、ハイロミズナギドリ、更に北上するにつれ、コアホドリもあちこちに見られた。(H・17年5月、太平洋フェリー利用の折、甲板真下から飛び立つア

カエリヒレアシシギとハイロヒレアシシギの混群が見られ、見事なものであったが、その時の事を思い出し、もしやと気をつけていたものの、航路、季節の関係もあるのであろうか、一羽も見られず、残念であった。)そして、この日の午後は「北大、北方生物圏フィールド科学センター」の講師による「カムチャッカ半島の自然について」の講演があり、カムチャッカはソビエト時代から閉鎖された区域であり、入域が制限、今も手付かずの自然がとて多く残されているという事、そして特徴的な鳥、海獣類、植物、世界遺産の火山群も多く、釧路湿原(310万ヘクタール)の150倍の湿原を有する事、ケイマフリ・ウトウ・エト



ピリカを代表に、オオワシは世界の50パーセントが繁殖し、海獣のラッコについては総数の20万頭のうち、1万頭がロシアに生息する事等、非常に興味深いものであった。余談ついでに、「カムチャッカ」の語源は、「魚」と言う意味の「カム」と、「燻製」という意味の「チャッキ」とが結びついたものだそうで、半島の形を思うと、なるほど、である。ところで、この船旅でのバーダーさんは、というと思いのほか少なく、私達以外は厚岸から来られた講師のかたと東京からの男性ただ一人であった。そして7月4日、船は釧路沖へ。しかしこのあたりはガス多く、一度だけイルカ数等が見られたのみ、この後、北方四島をあとにいよいよ北の領域にさしかかる。空気はますます冷たく、2日ぶりにコアホウドリ、フルマカモメ、ケイマフリ、そしてついに初見のエトピリカ、加えて自然界のアザラシを目にし、感激。

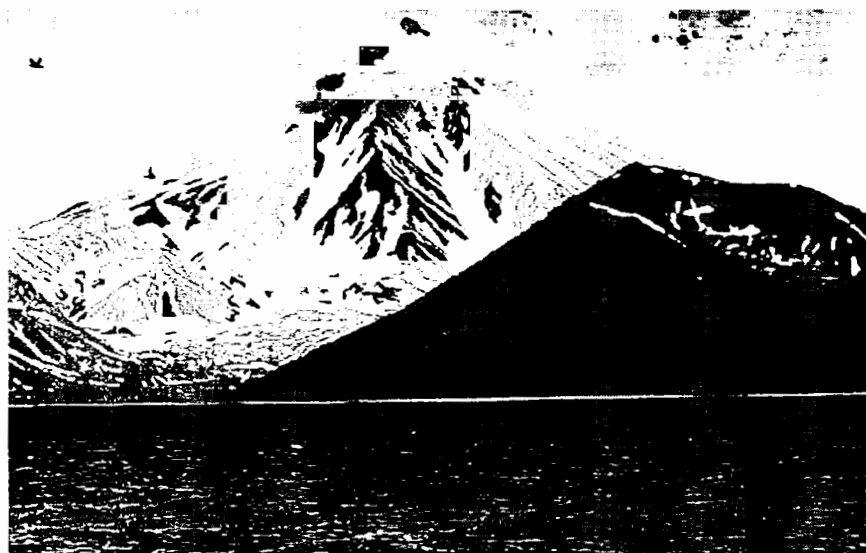
7月6日朝、ようやく州都ペトロパブロフスクカムチャッキーへ入港。ここは時差+4時間、7月の平均気温14度最低気温8度、寒かった。停泊中の湾内では、エトピリカ2羽が潜水採餌。この日は通船に乗り換えて2時間、スタリチコフ島へ。その後6人乗りのゴムボートに乗り換え、揺れに揺られて島のまわりを40分、ボートのロープにしがみついていると、今にも海鳥の仲間入りしてしまいそうな、そんな状況だった。(それでも、なんとか証拠写真程度は写す事が出来た。)

ここでは、エトピリカ、ウミガラス、ハシブトウミガラス、チシマウガラスなどの群れがそこここに見え、近づくボートに慌てて飛び立つ様子や、数羽のピロードキンクロ、シノリガモ、崖の上では沢山のミツユビカモメの営巣も見られ、唯一ツノメドリを確認出来なかったことを除いては、「海鳥の宝庫」と言われるだけの事はある、と大満足の一日となった。しか

し、昼食のお弁当は二人とも、本船へ帰るまで全く手につけられないほどのひどい船酔いの1日でもあった。尚、ツノメドリについては、講師のかたは1~2羽が飛び立つのを見たという話であった。現在、天売島でのウミガラスは10番が繁殖しているそうで、同じ北の海、日本海域でも、もっと増えてくれれば、と思わずにはいられなかった。

そして翌7日は州都の観光が主であり、短時間だったためか街で目にしたのはわずかにカラ類(声のみ)とハシボソカラス、スズメのみ。8日上陸のアトラソフ島(無人島)海上では、おなじみウミガラス、フルマカモメ、岩場では沢山のオオセグロカモメとヒナ、ハクセキレイ数羽、林縁ではしきりと鳴くノゴマの声が響いていた。

9日のパラムシル島(人口4200人)においては、やはりハクセキレイとノゴマ、アカハラ数羽を確認、岩山ではカラスが騒々しく鳴き、子カラスの羽ばたきの練習が見られた。この後、濃霧による航路変更で通過の第2クリル水道では、モグラたたきのモグラの如く、ラッコが次々と海面に現れては沈み、あっという間に船尾へと遠ざかるその姿には、他の乗船客からも歓声が上がった。やはり自然は面白い。この思いがけない光景をあとに、進路は横浜へ。帰路もまた海鳥を、と願ったけれどあいにく近づく低気圧の為、視界不良、



ペトロパブロフスク・カムチャッキーの背後にそびえる
コリヤーク山 (2,700 m)



特集：海外旅行の鳥

見かけたのは、たまたま写真に写っていたハイイロウミツバメ、それ以外はカモメ、フルマカモメのみで、全くの期待はずれであった。

今回、湿地や内陸部へは行けなかったけれど、文献によると、春秋に通過するシギ類に、タカブシギ、チュウシャクシギ、オバシギ、ハマシギ、トウネン、ムナグロ、キョウジョシギなどが記載され、繁殖もしくは繁殖するだろうとされるものにキアシシギ、ヒバリシギなども記載されている。また、亜種として成立し、生息すると思われ

るものに、オオアカハラ、オオノゴマ、オオカワラヒワ、オオベニヒワ、オオムシクイなどの名があるのも興味深いことである。島で見たアカハラはもしかすると、オオアカハラの可能性も一とあとで思ったけれど、今となっては定かでは無い。こうして4日後、横浜港へと着岸、北で出会った素晴らしい自然がいつまでも自然のままであるように、と願いつつ北方への旅は終わった。

『ドロミティ・アルプス』の鳥たち

川口久美 (津市)

イタリア最北部、オーストリアチロール地方近くの3千メートル級の山々の連なりを「ドロミティ・アルプス」と言う。

会社を早期退職し自営業となったのを機に、妻と当地へ初夏のハイキングツアーに参加した。そのとき出会った鳥たちや旅の出来事を紹介することにします。

【ニシイワツバメ (House Martin) とヨーロッパアマツバメ (Common Swift)】

山の麓にあるホテルの部屋に到着した。ベランダに出ると、天井にイワツバメの巣があった。出入りしている親鳥も日本のものと変わらない。

遠くの空には、翼を鎌形にしならせて数羽のアマツバメも飛んでいる。見るとこちらはホテル最上階の屋根の下の隙間に入っていった。似た生活



麓の村から残雪の「グランパラディーゾ山」を望む



をする両種であるが、適度な距離をおき、折り合いをつけながらお互いにうまくやっているようだ。

イタリアの夕食はゆったりとパスタで楽しむ。私は仲間たちの談笑にときどき相槌を打ちながら、ぼんやりと、窓の外をよぎるアマツバメの飛翔を肴にワインを飲む。こちらも結構うまくやっている。

【キバシガラス (Alpine Chough)】

ハイキングはホテルの玄関から歩き出す。朝露にぬれる花の草原を過ぎ、涼しいモミの林を抜け、標高が2千メートルを超える頃やっと岩ばかりの登山道となる。そして、このあたりから濃紺の空を背に飛ぶキバシガラスを見ることができるようになる。

以前ヒマラヤでこの鳥を初めて見たとき、その素晴らしい飛翔に惚れ惚れとしたのを思い出す。稜線を吹き抜ける風に浮かんで、翼や尾の形・角度を微妙に変えるだけで、いつの間にかはるか遠くの尾根まで移動している。数羽で「チューチュー！」と鳴き交わしながら何度も急降下して遊んでいる様子は、まさに「風の申し子」と言うほかはない。

コル（稜線の鞍部）に建つ山小屋に着くと十数羽が岩陰に降りている。赤い脚と黄色の嘴につややかな黒い身体がなかなか優雅である。熱い視線を送っていると、ハイカーに手渡しでクッキーをもらっているチャッカリ者もいる。おまけに横にいた仲間がそのクッキーを横取りに来る。やれやれ、お行儀のほうは、その飛翔や外見のように「エレガントに」とは行かないようだ。

【イエスズメ (House Sparrow)】

今日はアオスタへの移動日である。移動はドイツ人ガイド、ベリーさんのベンツで行く。長時間となるのでときどきサービスエリアで休憩をとる。

途中、同行の女性が、地面に群れているイエスズメに気づき、私に話しかけてくるので、「顔の

きりっと凛々しい方がよですよ」と教えてあげた。「じゃあ、早はどうなの？」と怪訝そうに聞くので、「瞳がつぶらで優しい顔をした方」と答えると、女性の目がにわかにな機嫌で輝いた。

【ズアオアトリ (Chaffinch)】

アオスタは、スイスとフランス両国境近くにある、イタリア側アルプス山麓の町である。マッターホルンやモンブランも近い。

今日のハイキングはグランパラディーゾ山(4,061m)の肩まで往復の行程である。私はベリーさんに言って登山口の観光地にひとり残り、近くの景色をスケッチして過ごすことにした。

川べりに腰掛けてスケッチブックを開いていると、通りがかりの子供や老夫婦が覗きに来て笑顔で何か話しかけてくる。やがて、私がイタリア語を「グラッツェ！（ありがとう）」と「ボンジョールノ！（こんにちは）」しか知らないことが分かると、つまらなさそうに、「チャオ！」と手を振って去って行く。

あたりが静かになると、ズアオアトリが足元まで近寄って来、日本人が珍しいのか首をかしげてこちらを見ている。私は、気づかぬ振りで画帳にペンを走らせる。

描き終わったらあそこに見えるカフェに行き、焼きたてのピッツァでビールを飲みながら、のんびりと仲間の帰りを待つことにしよう。

小学生の頃、花に飛んで来るスズメガを図書館の本で見たハチドリだと信じている時期があった。長じてときどき外国に行く機会もできた。そして、行く先々でそれぞれに違った鳥のいるのが不思議でならない。『その翼で、世界の何処へでも飛んで行けるはずなのに・・・』と。

どうやら私の思考回路は、「スズメガをハチドリだと信じた」子供時代のシンプルさを今も保っているようだ。おかげでいつまで経っても、野鳥の世界は不思議がいっぱいで飽きることがない。

(絵も作者)



特集：海外旅行の鳥

海外の野鳥(中米コスタリカ)

市川雄二(四日市市)

私が海外の生き物に興味をもったのは、20年ほど前。北勢を中心とした昆虫仲間との海外遠征からはじまる。第1回目は、タイ国であった。95パーセントが敬虔な仏教国であり、微笑みの国として知られる熱帯の国である。自然観察を中心とする旅行は初めてであり、今でも、40℃以上の気温の中、蒸し暑いなかでの、色鮮やかな、素晴らしい野鳥との出会いが印象深く、鮮明に脳裏に焼きついている。その後、マレーシア、スリランカ、パラオ共和国、台湾、インドネシアなどを訪問した。訪問先は、ほとんどが熱帯・亜熱帯地方であり、蒸し暑さと激しいスコールに接し、自然の厳しさをも体験した。

最近、念願の環境先進国コスタリカの野鳥にふれる機会があったので、述べたい。2005年、年末から年始にかけて、旅行会社の8日間コスタリカ・バードウォッチングツアーに参加した。コスタリカでの滞在は4日間である。このコスタリカ行きには、豊かな生き物の世界が体験できることと特に世界で最も美しいとされる幻の鳥、ケツアールを見てみたいという目的があった。この国は、中米にあり、四国と九州を合わせた広さの国である。エコツーリズムの発祥の地であり、少ない面積の割には、世界で最も多様性に富んだ生態

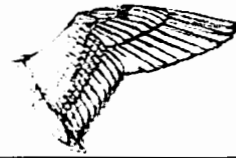


ケツアール

系を有している。その理由は、この国が北米大陸と南米大陸を繋ぐ架け橋に位置していることから、渡り鳥が集中すること。もう一つは、気候が熱帯から亜寒帯まで存在し、さらに、湿潤な所や乾燥した地域など多種多様な環境が存在していることである。この自然豊かな環境資源を活用し、国を挙げて、自然保護や環境教育に力を注いでいる。海外から、この多様性に富んだ自然のふれあいを求めて、多くの観光客が訪れる。また、産業は紅茶やコーヒーなど、自然を生かした産物が主である。経済と自然保護とが両立して発展している国といつてよいだろう。

さて、ケツアール(カザリキヌバネドリ)についてであるが、ケツアールはコスタリカの隣国ガテマラの国鳥である。しかし、美しい羽を目当てに乱獲されたり、生息地の森林が伐採されたりして激減した種のひとつである。いまコスタリカでは、本種の実態調査がなされ、保護対策がとられて、その数も維持しているようで、ガテマラより有名である。われわれが訪れた彼らの生息地は標高2,000m前後の熱帯霧雨林、やや開けた傾斜地に生えたアボガドの林が住みかである。湿気が多いため、木々には、シダ植物や地衣類が着生していた。目当ての鳥をなんと20-30mの距離で見ることができた。目の当たりにして、その美しさに見とれ、満足感にひたった。本種の雄は体長1m。

大半は尾で占めるので、体はハト位の大きさである。緑や青の背中、腹は赤と白、太陽の光に一層輝きを見せる。時折、長い尾をひらひらさせ、木々を飛び移っては、メスにアタックをしていた。アボガドの果実を好んで食べる。このアボガドの実を散布し、アボガドの種の分布を拡大させ、自分の生息範囲を広げるわけだ。しかし、開発の波には勝てず、そんなに簡単には増えることはない。この国は、国策として、ケツアールなど動植物の保護に努めている。本種の増加を期待したい。この近くにリンゴの木があった。その枝にハチドリが営巣していた。目線で、しかも2mの距離である。体長7~8cm位だろうか。卵がどんな大きさ



か見たかったが、やめた。ガイドさんに聞いてみると、卵の大きさは、小指のつめの大きさ位らしい。また、ガイド役には鳥類学者など、専門の知識や素養を備えた人たちが携わっていることを付け加えたい。親切に案内してくれた素晴らしいガイドさんにめぐり会い、わずか4日間の滞在で、

幻の鳥といわれるケツアール、コンゴウインコ、ハチドリなど200種以上の野鳥を確認することができ、十分堪能したコスタリカ・バードウォッチングの旅であった。今後、コスタリカが、環境立国として末永く持続・発展することを願いたい。

オーストラリアの野鳥

三浦 悟 (愛知県・名古屋市)
三重支部会員

(1) シドニーの野鳥

8月中旬に観光旅行の合い間に見かけたシドニーの野鳥です(観光そっちのけで鳥を見ていたという話もあります)。南半球は季節が逆の冬ですが、シドニーはそれほど寒くなくて、日本の5月くらいの気候でした。

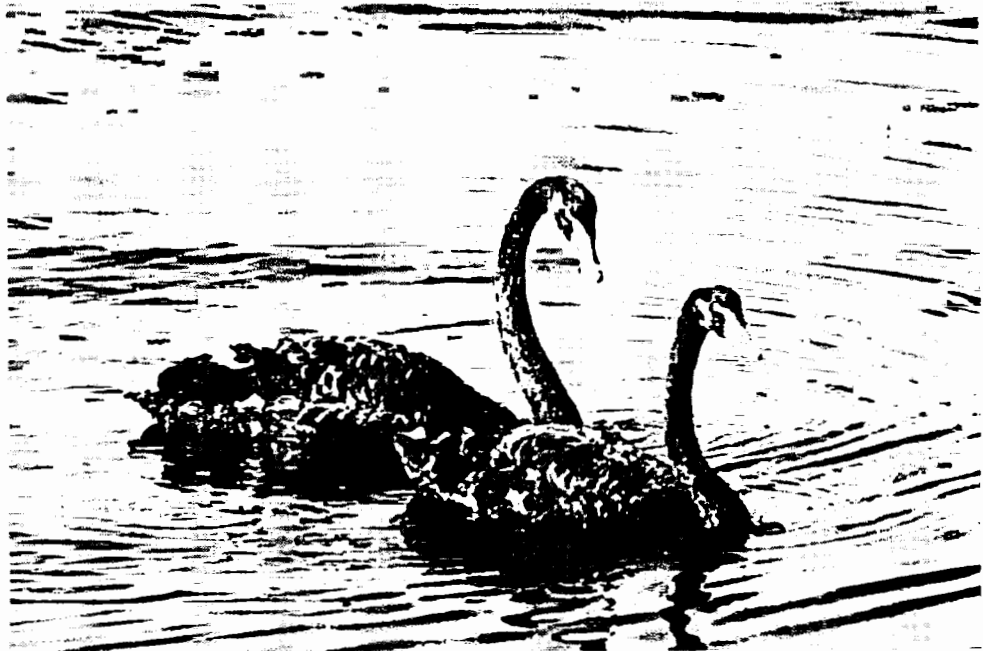
シドニー市内では、カバイロハッカ(移入種)、クロガオミツスイ、ゴシキセイガイインコあたりを、たくさん見かけました。ゴシキセイガイインコはきれいな鳥で、最初ディゴの花の蜜を吸っているのを見た時は感激しましたが、どこにでもいるのですぐに有り難味がなくなってしまいました。

クロガオミツスイは英語の Noisy Miner 通りにうるさい鳥でした。オーストラリアでは、スズメの仲間は移入種で、シドニーではイエスズメがいますが、数は多くないようです。メルボルンあたりまで行くと、(タダ)スズメもいるそうです。ツバメは、オーストラリアツバメが年中的いるようです。

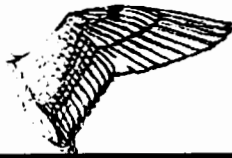
港などの水辺では、ギンカモメが

ちょうど日本のユリカモメのような存在です。残念ながら、ほかのカモメは見かけませんでした。コシグロペリカンもオーストラリアらしい鳥で、ゴールドコーストあたりでは餌付いているらしいですが、シドニーではあまり近くでは見るできませんでした。公園などでは、オーストラリアクロトキが多く、ドバトと張り合っただけ残飯をあさっています。クロトキは、日本だと大騒ぎになるのですが…。

市の中心部から歩いてすぐの王立植物園は鳥が多い所です。オウムの仲間のキバタンがたくさんいて、真っ白な姿、にぎやかな声ともに目立つ鳥です。池では、クロトキとミナミクロヒメウがコロニーをつくっていて、ネッタibanは日本のバ



コクチョウ



特集：海外旅行の鳥

ンより愛想がよく、ナンヨウクイナも目の前に出てくれました。カモの仲間は、マミジロカルガモが日本のカルガモ代わりになっています。ほかにも何種類か可能性はあるようですが、見たのはアオクビコガモだけでした。

シドニー近郊の世界遺産ブルーマウンテンへも足を伸ばしました。ミツスイの仲間は、オーストラリアらしい鳥です。ただ、森の中を観光ガイドの後については、鳥の観察にはもうひとつなのは仕方ない所でしょう。

シドニーは、オーストラリアのめばしい観光地の中では一番鳥見には適していないのかもしれませんが、初めてのオーストラリアと言うこともあってか、そこそこは楽しめました。観光は、印象に残っているのはオペラハウスだけです(笑)。

(2) パースの野鳥

前回のシドニーが思いのほか良かったので、10月上旬にパースへと出かけました。この時期の西オーストラリアはワイルドフラワーが真っ盛りで、花好きの人には答えられないようですが、そのせいで公園は人だらけで、鳥見にはちょっとです。パースでは、普段なら市内の公園でもワライ

カワセミは楽勝らしいのですが…。

パースへは、名古屋からは直通便がないので、シンガポール経由で行きました。乗り換えのチャンギ国際空港の屋上でギャーギャー騒いでいたのが、オオハッカです。多くの人がシンガポールで最初に見る鳥らしいですが、乗り換えの短時間では、私が見たシンガポールの鳥はこれだけでした。

パースが州都の西オーストラリア州の州鳥は、コクチョウ (Black Swan) です。市中心部から2kmほどのモンガー湖が有名ポイントですが、市内の川でも普通に見かけました。真っ黒な体に赤いくちばしは、ちょっと刺激的ですが、行動パターンは名城公園のお堀にいるコブハクチョウとなんら変わりません。モンガー湖では、マミジロカルガモ、ニオイガモ、オーストラリアアオタテガモ、タテガミガン、ノドグロカイツブリ、ネッタibanなどとともに、日本と同じオオバンもいました。

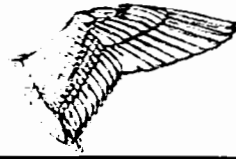
パース近郊の最大の観光名所は、荒野の墓標と言われる、ピナクルスの奇岩です。ここの大きな岩の上で、モモイロインコを見かけました。世紀の絶景よりも、その上にいる鳥に目が行くのは、鳥屋の性ですね。途中の海岸では、オオアジサシ

がたくさんいました。このあたりでは、オニアジサシもいるはずですが、残念ながらお目にかかれませんでした。

もう1ヶ所の観光は、フェリーで30分くらいのロットネスト島へと出かけました。ここの名物は、リス科の有袋類クオッカです。ピカチューのモデルとも言われる、とても可愛いやつですね。島の周りの岩場には、ミサゴが何ヶ所か巣をつくっていました。この島で見かけた、ヒジリショウビンがシドニーとパースをあわせて、オーストラリア



モモイロインコ



で見た唯一のカワセミの仲間です。ケアンズあたりだと種類も多いようですが…。

島には塩湖がたくさんあり、シギチがけっこういました。セイタカシギは、当たり前ですがオーストラリアセイタカシギで、トウネン、キョウジョシギもたくさん見ました。トウネンの中に、もしヨロネンが混じっていても見つけられないのはどこへ行っても同じですね。チドリは、アカエリシロチドリがいました。ミヤコドリは、全身真っ黒のオーストラリアミヤコドリというものもあるはずですが、目にしたのは津の海岸で見ると同じのミヤコドリの方だけでした。アカガシラソリハシセイタカシギという長たらしい名前のが親子でいてくれました。

ミツスイの仲間も何種か見ましたが、さすがは広大なオーストラリアの西と東、シドニーと同じなのはアカミミダレミツスイだけで、サメイロミツスイ、コシジロミツスイ、ウタイミツスイなどがいました。

どこへいってもそこそこ目に付くのがヨコフリオウギビタキです。何にでもちょっかいを出す鳥で、自分の何倍もある食事のミナミワタリガラスにアタックしたり、散歩中の犬にまでもからんだりして、迷惑がられていました。

ギンカモメ、コシグロカモメ、オーストラリアツバメは、シドニー同様にたくさんで、オーストラリアではどこでもみかける普通種のようにです。

北の島シェトランドの鳥

平井正志(津市)

シェトランドという言葉はなぜか頭の片隅にあった。鳥が多いという以外ほとんど何も知らなかった。スコットランドにいる娘を訪ねて旅行することになり、シェトランド行きが2006年夏に実現した。スコットランド北部の都市アバディーンを離陸したプロペラ機は静かな北海を渡り、やがて島の南端の飛行場に着陸した。これまで訪ねた最も北の地、南北150kmの細長い島である。

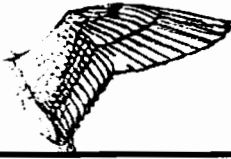
断崖のコロニー

シェトランド島の南端、サンバラ岬(Sumburgh Head)の灯台の下には海鳥のコロニーがある。フルマカモメ、ウミガラス、Puffin, Razorbill, トウゾクカモメ、ミツユビカモメ、多くの海鳥が断崖に巣を構えている。とりわけPuffinは下膨れの顔で愛嬌がある。日本にいるツノメドリとそっくりであるが、嘴の模様など少し違い、別の種、ニシツノメドリとされている。崖の岩の隙間で子育てをしているらしい。

ウミガラスは黒い頭に白と黒のスマートな体。かつて北海道の天売島で多数が繁殖していたが、現在は極端に少なくなっているという。ここでは無



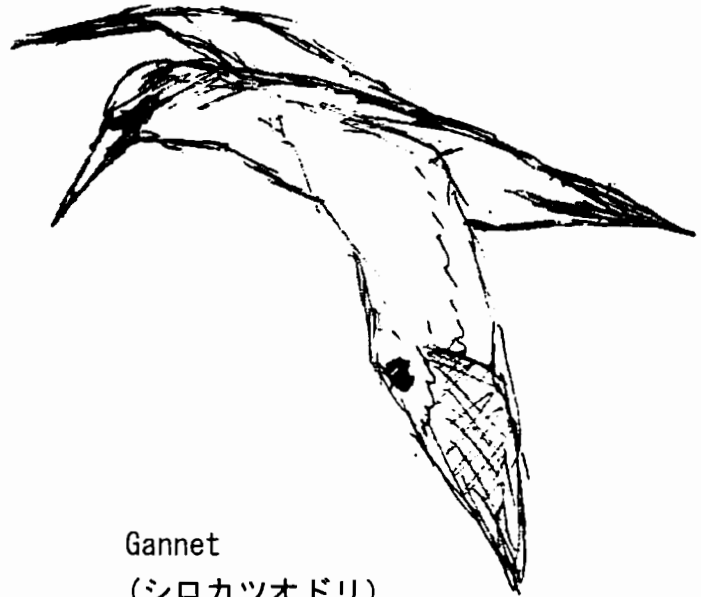
サンバラ岬のコロニー



特集：海外旅行の鳥

数のウミガラスが繁殖している。崖の下の方に大集団でいて、残念ながら、近くでは見えない。フルマカモメはこの島では普通種である。カモメとすこし太っちょにしたような体をしているが、飛び方は極めて優雅で、羽を水平に保ったまま、羽ばたきもせず、崖に吹き寄せる風を利用して滑るように飛び回る。崖のあちこちで静かに抱卵していて間近に見ることができる。顔つきはとてもやさしい。

Razorbillの体つきはウミガラスそっくりであるが、とても変わった嘴をしている。ウミガラスが集団でいるのと同じ、つがいごとに巣を構えているらしい。数はあまり多くない。オオハシウミガラスとの和名がつけられている。シェトランドにはこのような海鳥の集団繁殖地が幾つかある。このサンバラ岬のものは車で簡単に近づける。そのほかは本島から離れた小島にあたり、道路がなかったりして近づけない。全体をあわせるとおびただしい数の鳥になる。ウミガラスは16万、Puffinも20万、フルマカモメに至っては60万という。ちなみに人間は2万2000人、羊は33万頭。ただ、島で買ったレポートによると2000年以降、海鳥の繁殖率が急



Gannet
(シロカツオドリ)

激に落ちている。何が原因なのか書いていないが、心配である。日本のウミガラスもエトピリカもかつて天売島で大繁殖していたが、現在では極端に少なくなっている。

海の鳥

ホテルの近くに小さな砂浜がある。この島の砂はどこも、白く、その色が海までも、まるでさんご礁のように明るい色にしている。着いた日の翌朝その浜を見てみた。海岸の波うち際で黒っぽいカモメが餌を取っていた。のっぺりとした顔、ケワタガモのメスである。脇の黒と褐色のしぐい横斑がとても魅力的である。黒い産毛でおおわれたヒナもいる。ヒナたちも水に頭をつっこんでしきりにアオサを取っている。オスは沖合いにいた。真っ白な生殖羽のものは1羽だけで、それ以外は白黒のごちゃ混ぜの羽毛である。子連れのケワタガモは警戒心が強くないらしく、かなり近寄れる。尾のながいクロトウゾクカモメ (Arctic Skua) がいた。この鳥は魚を捕ってきた海鳥をみつけて、襲いかかる。キョクアジサシもたじたじで逃げ回る。トウゾクカモメは羽を翻し、切り替えし、切り替えして襲い掛かる。そのテクニックとしつつこさは並大抵ではない。沖合いでおそわれたミツユビカモメは魚を吐き出したようだ。トウゾクカモメは海面すれすれで何かをさらって飛んでいっ



キョクアジサシを襲う
クロトウゾクカモメ



た。このクロトウゾクカモメには黒いものと下面が白いものと2形がある。ここにはもう一種トウゾクカモメがいる。オオトウゾクカモメ Great Skuaである。こちらはがっしりした体型でやはり濃い茶褐色、初列風切根元の白い部分がめだつ。この鳥が海鳥を襲っているのを見たことがない。草原で鳥の死骸を食べているのを見た。アジサシはきわめて多い。どうやらキョクアジサシ (Arctic Tern) である。アジサシとよく似ているが初列風切に暗色の部分がなく、尾が長い。近くで繁殖しているらしく、小魚をくわえて滑走路の向こうに飛んでいく。

この海で目立つ海鳥のひとつに Gannet がいる。後で知ったが和名がありシロカツオドリというようだ。カツオドリの一種である。大型の鳥で白く長い翼は初列風切だけが黒い。白く長い胴体。やや重たそうにしきりに羽ばたいて飛ぶ。魚を見つけると上空から翼を翻し、頭から海に飛び込む。長い羽は器用に体の後ろに残すので、飛び板飛び込みの選手のように水しぶきはさほど立たない。この鳥は風が強い時には翼をまったく動かさず、波頭の風をとらえて、高く舞い上がっては反転し、海面すれすれまで滑り降りるミズナギドリの飛び方ができる。様々な海鳥を育てる北海の豊かさが思われる。

草原の鳥たち

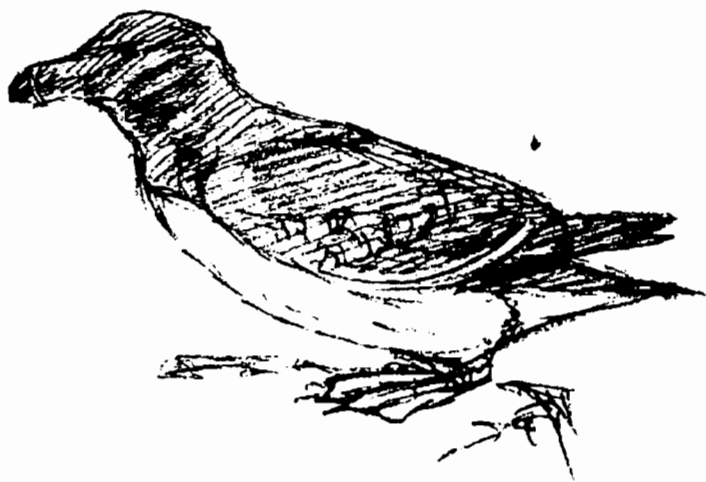
シェトランドでは草原となだらかな丘がどこまでもつづく。山というほどの山はなく、最高点で300mくらいである。高い樹木はまったくない。その草原が羊の放牧地となっていて、柵で覆われている。牧草が生えているところはあまり多くなく、わずかな草しか生えておらず、ミズゴケの湿地のようなところもある。そこにも羊が放牧されている。ミヤコドリはここでは草原の鳥、きわめて多く、騒がしい。静かに海岸で餌をとっている日本のミヤコドリとは全く違う。ホテルの近くでも営巣しているようだ。チュウシャクシギも多い。これも草原の鳥で繁殖している。ホーイイホーイイという声をよく聞く。どこかで抱卵しているの

であろう。ハマシギやムナグロの繁殖地は離れた島にあるようだ。タシギも、コシギも繁殖しているというが、タシギを一度ちらっと見ただけであった。

草原のなかのあちこちに大小の湖がある。スコットランドと同じくロッホ Loch と呼ばれている。その岸辺ではカモメ類が繁殖している。またアビのなかまアカエリオオハムもいる。首の前面が赤いのでこの鳥とわかる。アビの仲間は数種いるらしい。

このシェトランドはイギリス最北の島である。北緯60度、極東でいえばカムチャツカ半島より、北にある。おどろいたことにこの緯度の地に5000年くらい前から人類がすみついていたらしい。メキシコ湾からの暖流のおかげであろう。島に木が全くない。少ないにしろ、本来はある程度の樹木があったのではないだろうか。おそらく、材木の利用のために、あるいは放牧の目的切り倒したのか。樹木がないため、木に巣をかける鳥は繁殖できない。背丈の高い草やヨシもない。鳥相はかなり特異である。タカの類はまったく見なかったし、スズメ目の鳥もきわめて少ない。ただホシムクドリはかなりいて、あちこちにある石積の塀の隙間に営巣している。われわれの目には大自然に見えるこの土地の様子も実は人間の営みによって改変された自然なのである。

Razorbill
(オオハシウミガラス)





探鳥の会に参加

杉村滋弘 (津市)

3年前、35年間勤めた企業を定年退職して家族の待つ三重県津市に戻りました。妻の実家の寺を継ぐことになって、妻と子供たちは一足速く津に帰っており、約20年は殆ど単身赴任に近い生活で大阪、東京、海外を飛び回っておりした。企業戦士の雰囲気から脱し、名刺のない個人生活に慣れる必要もあり、また、長年の夢でもあった、四国88ヶ所歩き遍路の旅、1400 kmに挑みました。予想外に早く35日間で高野山のお礼参りも済ませて津に帰ることができました。四国の野山や海で多くの鳥を見、色んな鳴き声を聞いて心を慰められました。津に帰っても、毎朝の散歩コースである安濃川や郊外の田んぼで沢山の鳥を見る機会があり、家の庭にも様々な鳥がやって来るので、この鳥たちの名前を知りたいと強く思うようになりました。

市や県の講座で野鳥見学や探鳥会等が無いか探したのですが、開講中のものは見つかりません。がっかりしましたが、野山に出かける機会の多い樹木探訪の講座を見つけて参加することにしました。その樹木の講座でお知り合いになったのが長く探鳥を続けておられる西浦さん、石原さん、このお二人のお陰で日本野鳥の会三重県支部に加盟させて頂きました。やっと探鳥会のお仲間になれたという次第です。

探鳥の会初体験は、雲出川河口のシギを対象とする会でした。双眼鏡と日本野鳥の会発行の水辺の鳥ガイドブックを持って恐る恐る出かけました。20人弱の人達が三脚付の長い望遠鏡を構えて海岸を見ておられました。取り纏めは樹木講座で野鳥の会を教えていただいたお二人でしたので、ほっとして緊張から開放されました。初心者の私ども向けにシギの渡りの説明と、手作りの実物大の各種シギの模型看板や渡りのルートを書いた模造紙を前にしての丁寧なお話があり、その後実際の探鳥になりました。特にミュビシギが多く、その他のシギやカモメ類等が見えました。自分の双眼鏡では手ブレして見難かったのですが、リーダーの方の望遠鏡で見せてもらったシギは何とも可愛らしい仕草で、すっかり虜になりました。

鳥が飛来する干潟が減っている中、レジャーでやってくる人が故意ではないにせよ鳥を追い払ってしまっている現状の説明があり、自然を守る難しさを実感しました。

今回の体験で益々探鳥に魅せられ、望遠鏡の威力を知り、すぐさま購入する事にしました。すばらしい経験をさせていただいたお二人に、また、快くお仲間を迎えてくださった皆様に心から感謝です。今後は機会あれば様々な探鳥の会に参加させていただきますので宜しくお願いいたします。

白塚町屋探鳥会に参加して

中川佐恵 (津市)

初めて探鳥会に参加させてもらいました。主に県鳥であるシロチドリと300羽近くミュビシギを観察した。羽数の多さと波打ち際で採餌する姿や体の小ささに驚き、ずっと観察していても飽きないかわいさを感じた。私が主にバードウォッチングしているのは志登茂川下流にくるシギ類やカモ類、自宅近くの水田にいるサギ類だった。初めて観察するミュビシギ、シロチドリの行動や形態がいつも観察している鳥と異なり、興味が湧いていた。

探鳥会はメンバーの皆さんから着眼点などを教えて頂き、観察するものでした。ミュビシギとシ

ロチドリの模様の違いはどんなところか。採食方法や採食場所、人が接近した時の警戒の仕方などを観察して気づいた。

そのほかにも白塚町屋の海岸も不思議な物(海産物の加工所の排水ポンプなど)があり鳥以外にも教えてもらった。鳥に対する私の興味のほかにも興味を持つことができ自然などを観る視野が少し広がった。

探鳥会に参加させてもらったので、探鳥をする楽しさが増した。また、鳥などについて今回はほとんど質問ばかりでしたが、様々な皆さんと意見交換できたことや鳥意外にも興味を持てたことなど、探鳥会の良さを感じた。また、探鳥会で新たな発見をしたいと感じた。

ふあるこおばちゃんの 今日も鳥日和 その11 ぐうたら鳥見 2006 Autumn



エゴは、あんなに実がなるのに野外で実生苗をあまり見かけない。ヤマガラが種を食べるせいだろうか。ヤマガラが貯食して食べ忘れた実から、芽が出ているところを確認してみたいものだ。

田舎に住んでるので、居間の窓から鳥見が楽しめる我が家。エゴの木を植えた思惑が当たって、ヤマガラが実を食べるかわいしくさが手にとるように見える。

今年はとくに賑やかで、3羽が入れ替わり立ち替わりやってきて、あっというまに実を食べ尽くしてしまった。家の前の電線にはムクドリ、カラス、ヒヨドリ、スズメはじめ、イソヒヨドリやエナガ、ホオジロ。庭のブルーベリーやピラカンサスの実を自当てにメジロ。

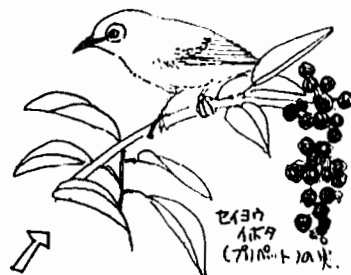
窓から身を乗り出して双眼鏡やカメラを振り回しているおばさんって、外から見たら変だろうなあ。



空中を何かに衝突し隣家のガレージ屋根に墜落したメジロ。気を失っている……



果房は押して海の中まで落ちる。



セイウチノボク (アフリカ) の実。

メジロちゃんが外来植物の野外種子散布に一役買っているのは間違いない!



エナガがとると電線が妙に太く見える。たくさんとると五線譜みたい。

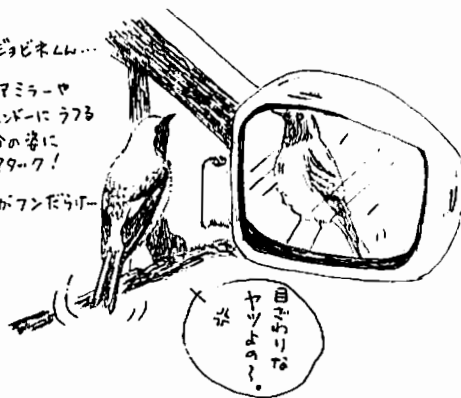
今シーズンはツグミ類、ウソなどが平地に降りてくるのが早い気がする。熊の出没といい、山に木の実などの食糧が少ないせいだというが、みんな無事に冬越しできるといいですね。



今シーズン初のツグミは白蛇前電線に1羽止まっていた。

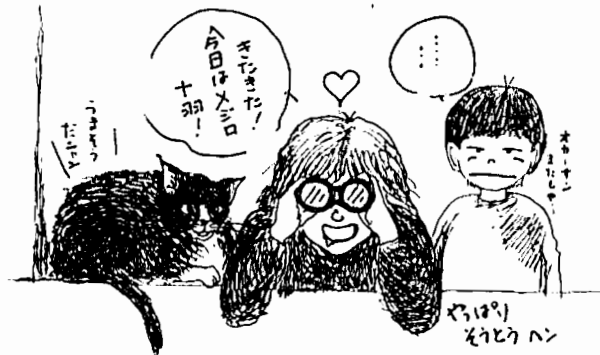


スズメは嫌われ者に強すぎ!



ツグミ……
ドミラーやウインドーにうつる自分の姿にアウク!
車がブンだうー

目撃したヤシキリは……



おばちゃん! 今日メジロ十羽!

……

おばちゃん!

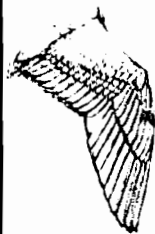
……

おばちゃん!

……

おばちゃん!

今日も鳥日和



小坂里香 (度会郡度会町)



アートギャラリー

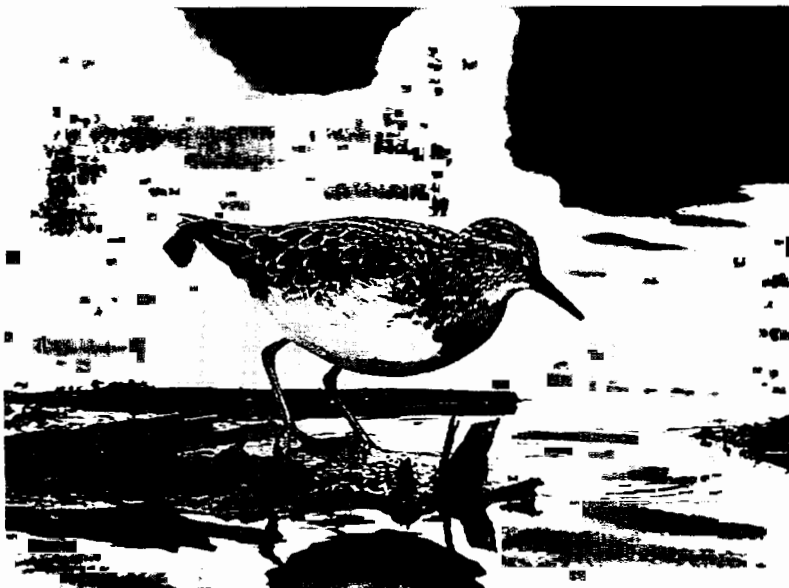


アオバズク

アカエリヒレアシシギ



ヒバリシギ



しろちどり 53号

デジタルカメラの普及によって手軽に写真が撮れるようになると見た鳥は写真で残したいと思うようになりました。出来るだけ県内で撮りたいと思っていますが、それにも限界があって県外に出掛けることが多くなっています。

横山真一（桑名市）



鳥羽行者山タカの渡り調査結果

三重県支部事務局・保護部

調査方法：2006年9月26日から10月15日までのうち8日間、午前中に鳥羽消防署に隣接した空地で目視と双眼鏡によるタカの渡り調査を行った。遠距離の個体の識別には望遠鏡を用いた。

結果及び考察：この間合計で248羽のタカの渡りを観察した。ミサゴとトビは多く観察されたが、渡りと判別できるものはなく、調査から除外した。渡った猛禽のうちサシバが213羽であった。タカ類の飛行コースは以下の3つに大別できた。
A: 北側コース：消防署の北側、197 mの相生山

ピークから赤崎神社に至る稜線付近を通るコースを通るもの、 B: 行者山コース：消防署真上付近を通過して行者山北面に向かうもの、 C: 南側コース：加茂川沿い、あるいは加茂川右岸（南岸）の山林上を南へ向かうもの。南側コースを飛行したものの一部は行者山南面に向かったものが含まれると思われるが、山の陰になり、どちらへ向かったかは判別できなかった。

観察日のうち10月3日から8日は太平洋を通過した低気圧のため、北西の風が非常に強かった。サシバの渡りのピークは10月9日であり、119羽が観察された。ハチクマの渡りも10月9日が最も多く、12羽が観察された。

渡りのコース別では北側のコースと中央の行者山へ向かうコースを飛行する個体が多かった。10月3日と10月10日は北側コースが明らかに多く、10月9日は中央のコースを飛行するものが特に多かった。これまでのタカ

表1: 鳥羽におけるタカの渡り観察個体数(2006年)

	9/29	10/3	10/7	10/8	10/9	10/10	10/12	10/15	合計
サシバ	2	26	1	10	119	45	4	6	213
ハチクマ	1	0	0	0	12	0	2	1	16
ノスリ	5	1	0		1	2	3	1	13
チョウゲンボウ						1		1	2
チゴハヤブサ					1				1
小型タカ類					2		1		3
合計	8	27	1	10	135	48	10	9	248

表2: コース別の観察個体数(2006年9月29日～10月15日)

	北側コース	行者山コース	南側コース	合計
サシバ	90	95	28	213
ハチクマ	5	10	1	16
ノスリ	4	5	4	13
チョウゲンボウ		2		2
チゴハヤブサ	1			1
小型タカ類		2	1	3
総計	100	114	34	248

表3: 多数個体が観察された日のコース別観察個体数(2006)

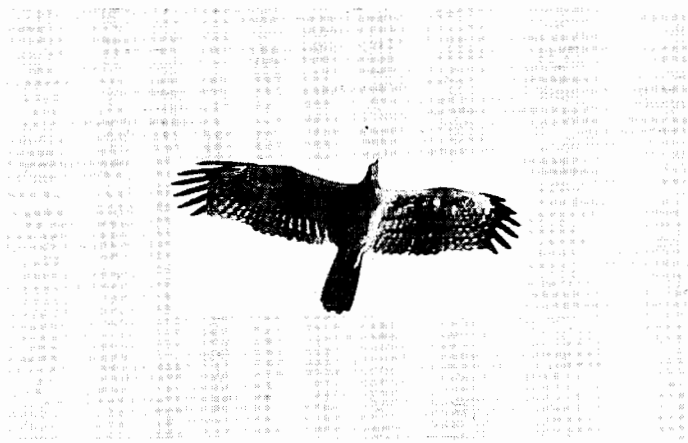
10/3		北側コース	行者山コース	南側コース	合計
	サシバ	21	3	2	26
	ハチクマ				0
	ノスリ	1			1
10/9	サシバ	11	87	21	119
	ハチクマ	4	7	1	12
	チゴハヤブサ	1	0	0	1
	ノスリ		1		
	小型タカ類		2		
10/10	サシバ	44		1	45
	ノスリ	1		1	2
	チョウゲンボウ		1		1

渡り観察で安楽島付近に上陸する個体をもっとも多く観察されている(吉居ほか1993)。安楽島付近に上陸したタカは天候、おそらく、風向によりコースを選択している可能性がある。タカ類の飛行コースについてはさらに詳しい調査が必要であろうが、行者山がタカ渡りの重要な飛行コースであることは疑いもない。

タカ以外の鳥類の渡りも観察された。ヒヨドリは多く、数羽から数百羽の群が観察された。観察したすべてを記録したわけではないが、記録された渡りの個体数は9月29日300羽、10月8日115羽、10月9日



調査・研究のページ



行者山付近を飛ぶハチクマ (川村撮影)

1160羽 10月10日 30羽 10月15日
790羽の合計2395羽であった。10月9日
の観察では多くのヒヨドリが行者山コ
ースを飛行した。それ以外にキセキレイ、
セグロセキレイ、ハクセキレイ、カケス、
アマツバメなどの渡りが観察された。

参考：志摩半島のタカ渡り。吉居清・吉
居瑞穂・橋本祐子 三重野鳥の会(1993)

観察参加者 西村泉・川村晴彦・近藤
義孝・村田芳雄・田中豊成・平井正志

2006年シロチドリ繁殖調査

2006年 5月20日 町屋浦弁天樋門から田中川
河口干潟まで調査した。

町屋浦 3羽、豊津浦 山勇水産前 3羽(う
ち1羽は幼鳥かもしれない)、豊津浦 中別保
樋門前 2羽、田中川河口干潟付近の草原 4
羽。

合計 12羽(成鳥11羽、幼鳥?1羽)明確
に今年生まれたヒナは発見できず。

2006年5月25日 豊津浦 ヒナ2羽

2006年5月28日 豊津浦 平井 ヒナ2羽(お
そらく25日のものと同一個体)

2006年6月6日 町屋浦 ヒナ2羽(うち1羽標
識) 豊津浦 ヒナ1羽(おそらく25日のもの
と同一個体)

2006年7月9日 豊津浦 ヒナ1羽

以上の観察から今年この海岸で発見されたヒナの
合計は5羽であった。

調査：石原 宏・橋本富三・平井正志

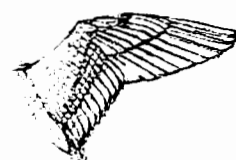
三重県下鳥類棲息調査結果

保護部

2005年秋から保護部の呼びかけで三重県下各
地において鳥類棲息調査が行われています。これ
まで、探鳥会は数多く行われてきましたが、鳥が
多い季節だけに限られる傾向が強く、また、探鳥
会であるがゆえに、見落としや誤認などもありえ
ます。さらに個体数の調査もほとんどされていま
せん。今回は、地区毎にいくつかの場所を選び、

ほぼ毎月、棲息数をカウントする調査を行いました。
ラインセンサスあるいは定点観察によってい
ます。調査を継続している場所もありますが、ほ
ぼ1年が経過したので、支部報紙上で順次公表し
ます。鳥類の棲息数変動の傾向を把握し、今後の
棲息地保全に役立てたいと考えます。

なお公表にあたっては猛禽の繁殖、あるいは公
表することにより、マニアが集中するおそれのあ
る鳥については削除してあります。従って、「こ
れ以外の鳥は観察されなかった」というデータで
はありません。



横山池調査結果

1) 調査場所の概略

津市芸濃町椋本地内にある農業用ため池。大きさは約700平方メートルで北池と南池に分かれる。池の東、南は市道で囲まれ、東側は田んぼ、北、南側は民家、北西から西側にかけて雑木林、畑、養鶏場などが点在し、その向こう側にはゴルフ場、遠くに鈴鹿山系が望まれ、周囲は人通りも少なく比較的良好な自然環境が保たれている。工事以前は西側の岸に近づくことはできなかったが、工事により、未舗装ながら、道が作られた。観察には都合がよいが、鳥類の生息にとってどうなのかが心配である。

2) 調査方法の概略

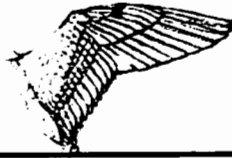
調査は、月1回のペースで9時頃から約2時間をかけ、北池と南池を隔てる堤防上および西側の雑木林と池の間の未舗装路でラインセンサスにより行った。必要な場合は南池南端の堤防からの観察を付け加えた。

3) 結果で特に注目すべきポイント

13回の調査のうち、オオタカの飛翔が4回確認され、うち2月12日にはコガモを狙うオオタカの幼鳥が観察された。これらから、近くで営巣、繁殖の可能性が高いと考えられ、今後詳細な調査

横山池調査結果

調査日	2005					2006							
	9/12	10/1	10/30	11/27	12/24	1/28	2/12	3/12	4/2	5/14	6/17	7/15	8/12
調査開始	9:05	13:15	7:45	13:17	9:00	8:10	10:30	9:50	6:30	8:55	9:50	8:45	8:55
調査終了	9:55	14:05	9:35	14:11	10:00	9:30	11:30	11:25	7:30	10:10	10:45	9:30	10:10
カイツブリ	9	4	8	4	2	5	4	4	5	12	12	18	23
カムリカイツブリ						2							
カワウ	4	1	4	2				7	1		2	11	10
ゴイサギ													2
アマサギ		6											
ダイサギ	1											1	5
チュウサギ		1											
コサギ		4											1
アオサギ	2	3	3	1			1			1	1	12	3
マガモ		1		43									
カルガモ	21	57	21	26	32			28	13	6	3	11	2
コガモ		47	54	233	322				42	12			
オカヨシガモ			3	13	26								
ヒドリガモ		1	2					3					
オナガガモ		3		5									
ハシビロガモ			3	2									
ホシハジロ				7				44	22				
キンクロハジロ			12	2	2		10	14	2				
ホオジロガモ						2							
ミコアイサ							3						
トビ													2
オオタカ					2	1						1	1
ハイタカ					1								
ノスリ					1								
チュウヒ				1									
コジュケイ			s							1			
キジ									1	1			
オオバン									2				



調査・研究のページ

横山池調査結果(続き)

調査日	2005					2006							
	9/12	10/1	10/30	11/27	12/24	1/28	2/12	3/12	4/2	5/14	6/17	7/15	8/12
調査開始	9:05	13:15	7:45	13:17	9:00	8:10	10:30	9:50	6:30	8:55	9:50	8:45	8:55
調査終了	9:55	14:05	9:35	14:11	10:00	9:30	11:30	11:25	7:30	10:10	10:45	9:30	10:10
ケリ	2												
イソシギ	1												
キジバト						1		3	1		2		1
アオバト								1					
ツツドリ										1			
アマツバメ									2				
カワセミ	1												
コゲラ			s		3	s	1	4					
ヒバリ								1					
ツバメ	13	2							22	17	11	9	8
イワツバメ									5				
キセキレイ				1									
ハクセキレイ				1	1			2					
セグロセキレイ	1		3	1		2	3						
ビズイ									1				
ヒヨドリ	3	4	9		3		10	2	1	1	4	1	2
モズ		2	2								1		
ツグミ							2	7	10				
ウグイス		1		1				2	1	1			1
オオヨシキリ										12	22	3	
セッカ	3												
エナガ			s		8	4	4	3	3				
メジロ					1	3	7	23					
ホオジロ	1	10			4	2	2	6	3	4	2		
カシラダカ			15		11	10	23	7					
アオジ				1	1	2							
カワラヒワ			1	1	30	11	1	12	1	1			
ベニマシコ									1				
スズメ										4		2	
ムクドリ		1					3	4					
ハシボソガラス	1	1					2		4	1			3
ハシブトガラス			2										
カラスsp.												1	
タカsp.									1				

が待たれる。またオオヨシキリは西よりの葦原に非常に多く、6月17日には22羽がさえずっていた。おそらくこの数のつがい繁殖しているであろう。

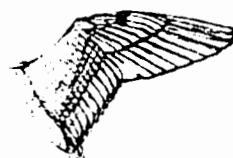
4) 探鳥への助言、注意

池の西側の未舗装路は比較的近くでオオヨシキリ、カシラダカ、メジロ、シジュウカラなどの小

鳥、堤防上では水面のカイツブリ、カモ類、運がよければオオタカのハンティングがたのしめる。駐車は池の南西隅から北に向かって入り、北池、南池を隔てる堤防近くのスペースに5、6台を置くことができる。尚近くにトイレはないので注意。

なおカモ類の調査結果については「しろちどり45号」に記載してある。

(調査：橋本富三・平井正志)



伊賀地区調査結果

調査は2005年8月初めより2ヶ月に1回の頻度で行い、現在も継続中である。

調査方法はラインセンサスで、あらかじめ設定されたセンサスコースを歩いて進行方向の左右それぞれ50mと上空で確認された鳥類及び個体数を記録した。

調査場所1：名張市東町 福西病院東側100mの地点より、北北東にのびる名張川に沿った右岸の堤防の約500mを調査した。

なお2005年9月の調査では名張市緑が丘を調査したが、見通しが悪く、調査条件が悪かったため、調査場所を上記の堤防に変更した。

調査場所2：名張市中村及び新田地区(美旗) 美旗古墳の南、貴人塚の北側の田畑、東西約600m南北300mの範囲を周回する農道を調査した。

調査場所3：伊賀市法花 法花集落の北に位置する山林内の東西にのびる約600mの林道を調査した。



カエデドコロ

(調査：小林達也・加納康嗣夫妻・小田久美子・安部好男夫妻・栢部宗嗣・井上康秀・田中重敏夫妻・淵脇逸朗・福田咲代子・寺田史子・宅原満里子・村中利光・田中豊成・福田尚子・中島寿実子・米田保幸・加納博子・中村啓子・坂上洋平・北際明博・山崎隆司)(順不同)

名張市東町調査結果

年	2005			2006			
	日付	調査開始	調査終了	調査地	調査地	調査地	調査地
	9/10	10/23	12/11	2/18	4/23	6/10	8/14
	12:00	9:15	9:10	9:15	9:00	9:10	9:15
	13:00	10:20	10:00	10:10	10:00	10:20	10:00
		緑ヶ丘	東町	東町	東町	東町	東町
カイツブリ			6	3	6		
カワウ	50	18	2	9	7	5	7
ササゴイ						1	
ダイサギ						1	
チュウサギ							7
アオサギ	2	9	1	7	2	8	5
マガモ		2					
カルガモ		7		6		12	17
コガモ				6	9		
オカヨシガモ				4			
ヒドリガモ				7			
トビ	2	1					
キジ					5		
バン		1					
コチドリ						3	
ケリ		2					
クサシギ		3	3				
イソシギ				1		1	1
キジバト		1	1	1		4	
カワセミ	1			1			
ヒバリ		4		2	12	4	
ショウドウツバメ		30					
ツバメ	3				50	36	3
コシアカツバメ	20	2				18	
イワツバメ				100		35	
キセキレイ				1			
セグロセキレイ		3	2	8	3	2	1
ヒヨドリ	1	2	2			16	6
モズ		5			3		2
ツグミ				1			
ウグイス			2	2	8	8	2
オオヨシキリ						6	
ヤマガラ	3						
シジュウカラ						2	
ホオジロ	1	14	5	18	14	16	4
カワラヒワ		8					5
スズメ		12	4	8			
ムクドリ							1
ハシボソガラス	8	9	5	6	5	6	2
ハシブトガラス		2	2				

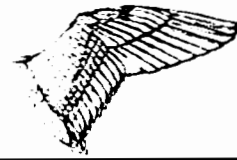


名張市美旗調査結果

年	2005			2006			
日付	9/15	10/23	12/11	2/18	4/23	6/10	8/14
調査開始	13:30	10:40	10:30	10:30	10:15	10:35	10:10
調査終了	14:30	11:40	11:40	11:45	11:30	11:45	11:30
カワウ	2		2				
ゴイサギ						2	
アマサギ							2
ダイサギ						1	
チュウサギ	1					5	23
コサギ	1						2
アオサギ		1	1				9
カルガモ						6	
トビ		3	3	1	1	2	1
ハイタカ	1	1	1				
ノスリ			1				
コジュケイ					1		
キジ							3
バン						1	1
タマシギ						5	
ケリ	6	7	8		9	17	12
イソシギ	1						
タシギ					1		
チュウジシギ	3						
キジバト	5	1			7	2	4
ヒバリ	1	25	4	6	40	27	8
ツバメ	12	1			30	41	50
キセキレイ		4					
ハクセキレイ			9			2	2
セグロセキレイ		1	2				
タヒバリ			8	15			
ヒヨドリ					12	6	4
モズ	1	1	3	1		1	
ノビタキ		5					
ツグミ				1	8		
ウグイス					6	3	
オオヨシキリ						18	
セッカ						4	6
ホオジロ		3	2			6	
ホオアカ			2				
カワラヒワ		6			2	4	3
スズメ	40	150	120		40	27	27
ムクドリ	3	23	32		5	1	
ハシボソガラス	10	18	14	12	6	7	
ハシブトガラス				2			3
ドバト	2		4			2	



クルマバナ



笹子谷林道

錫杖湖(安濃ダム)右岸道路の中ほどから南方向に延びるのが笹子谷林道である。全長約4kmで中間付近までは舗装されており、今回の調査は舗装の切れた所から上流の行き止まり部までをラインセンスで行った。

現在、調査経路の途中から経ヶ峰の近くを通り長野峠付近への林道建設が進みつつある。

調査コースは谷川を右に左に見ながら杉や雑木林沿いに歩くが、早春のアブラチャンの黄色の花や秋のシラキの紅葉など、年間を通して木々や草花など変化に富むコースである。

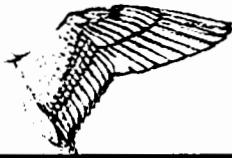
この谷で見られる鳥は、エナガやシジュウカラ、ヤマガラなどのカラ類が中心である。ヒガラが間近で杉の種子を食べる姿なども見ることが出来る。ヒヨドリ、メジロそしてカケスの姿を目にすることも多い。初夏にはオオルリやクロツグミの声も聞かれるが、谷が狭いのでその姿を確認するのは比較的難しい。谷川ではカワガラスの餌採りやキセキレイの澄んだ声も聞くことができる。

自然を楽しみながら探鳥が出来る良いコースであると思う。(表は24ページ)

伊賀市法花調査結果

年	2005			2006				
	日付	9/10	10/23	12/11	2/18	4/23	6/10	8/14
調査開始	9:30	13:20	12:50	13:20	12:50	13:10	12:30	
調査終了	11:00	14:40	13:20	14:30	14:30	14:40	13:30	
カワウ						3		
アオサギ						1		
カルガモ								
ハチクマ	1							
トビ	1						1	
サシバ	9							
コジュケイ	2					2		
キジ						8	1	
クサシギ								
イソシギ						3		
タシギ						1		
キジバト	2		1			3		
アオバト						1		
ホトギス							1	
ハリオアマツバメ	400							
カワセミ							1	
アオゲラ						3	1	
コゲラ		2				4		
ヒバリ								
ツバメ								1
コシアカツバメ		1						
セグロセキレイ								
ヒヨドリ	15	9	7	8	15	12	21	
シロハラ		2						
ツグミ			23		7			
ヤブサメ					2			
ウグイス		1			40	45	2	
キビタキ						1		
オオルリ						1		
エナガ	9	5	10		24			
コガラ			1					
ヤマガラ	2	9	3	4		4	2	
シジュウカラ		1		3	7	2		
メジロ	2			5	11	4	3	
ホオジロ		6			28	8		
カシラダカ					60			
アオジ					1			
アトリ					11			
カワラヒワ						1	5	
イカル							3	
カケス				1				
ハシボソガラス					3			
ハシブトガラス		3			6			
タカsp		3						

(調査：西浦克征・岡八智子)



調査・研究のページ

笹子谷林道調査結果

調査日	2005				2006							
	9/10	10/5	11/8	12/8	1/12	3/8	4/6	5/18	6/13	7/13	8/7	9/14
調査開始	9:50	9:45	9:40	9:30	10:00	9:45	9:45	9:45	9:45	9:45	9:45	10:00
調査終了	12:00	12:00	11:50	12:00	12:00	12:30	11:45	12:00	12:10	12:00	12:00	12:00
キジバト	5	3						1			1	
コゲラ			1							1	1	2
ツバメ											10	
キセキレイ	1	1		1			2	2	2	2	3	1
ヒヨドリ		1	3	3	12	2	2	4	15	14	7	5
カワガラス				1			1	1		3	1	
ジョウビタキ					1							
クロツグミ									2			
ヤブサメ								1				
ウグイス			1		1			3		1		
オオルリ								4	3	4	1	
エナガ			3	5		2	3	3	2			11
ヒガラ			1		1	6			2	1	1	4
ヤマガラ	1				3	3	3	2	6			2
シジュウカラ	4	2	3	3	4	6		2	1		6	2
メジロ		3	1	3	2			1	2	1	4	4
ホオジロ							1		1			
アトリ				65								
イカル								1		1	1	
カケス	4	1		2	2	1	4	1	4	1	3	2
ハシブトガラス		1				2	1		2			
アオゲラ sp.												1

※ 2006年2月は林道凍結の為調査中止。

鈴鹿川～鈴鹿派川調査結果

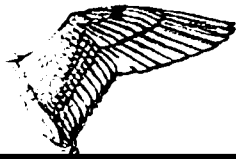
種名	年 月日	2005				2006								
		9/15	10/31	11/29	12	1/30	2	3/31	4/28	5/15	6	7	8/1	9/10
カイツブリ		9	25	18		23		5	○	6			10	6
ハジロカイツブリ				44		42		23		1				1
カンムリカイツブリ		1				8		11					3	
カワウ		514	403	106		43		74	○	55			287	137
ゴイサギ		1											3	
ダイサギ		40	7	1		1		2	○	1			5	10
コサギ		52	21	6		6		7	○	6			17	20
アオサギ		40	32	19		24			○	10			5	10
マガモ		3	219	391		164		134						
カルガモ		165	215	22		35		67	○	20			63	
コガモ		8	64	37		103		83	○					
ヨシガモ						1		4	○					
オカヨシガモ			6	65		48								
ヒドリガモ			214	451		146		199	○					
オナガガモ			220	448		297		6						1
ハシビロガモ			33	12		3		5						
ホシハジロ		1	44	293		334		399	○	1			1	1
キンクロハジロ			112	197		110		256	○	3				
スズガモ				13		618		558						
ウミアイサ				8		12		3						

しろちどり 53号



鈴鹿川～鈴鹿派川調査結果(続き)

種名	年 2005			年 2006										
	月日	9/15	10/31	11/29	12	1/30	2	3/31	4/28	5/15	6	7	8/1	9/10
ミサゴ			1						1					
チョウゲンボウ						1								
コジュケイ										1				
キジ									5	4			1	
バン			1						1					
オオバン			3											
ミヤコドリ			5	4						1			2	
ハジロコチドリ				5		1								
コチドリ									2					
シロチドリ		38		31		43		20	20	32			18	16
メダイチドリ									13	12			4	2
ムナグロ						2								
ケリ						3							4	
タゲリ						2								
キョウジョシギ		2								7				1
トウネン									1	40				
ハマシギ			2	578		253		12	13	80				
オバシギ		8												
ミュビシギ				17		8				35				
アオアシシギ			1							1				
キアシシギ		1							4	38			25	1
イソシギ		3	1	1		1			3	5			5	5
ソリハシシギ														2
オオソリハシシギ		2	4											
ダイシャクシギ			2											
チュウシャクシギ		5		1					27	26				
ユリカモメ		102	715	844		67		1457	○	49				6
セグロカモメ			19	19		14		19		1				
オオセグロカモメ								1						
カモメ						2								
ウミネコ		585	114	196		42		5		1			1801	707
ズグロカモメ						1								
アジサシ		78												
コアジサシ										22				
キジバト		4		1		9			○	7			1	1
ヒバリ								2		2				1
ツバメ		10							○	44			4	
ハクセキレイ		6	7	4		13		3	○	5				1
セグロセキレイ			2			2			1					1
ヒヨドリ			3	1		14		2	○	1				
モズ			1							1				
ジョウビタキ			5	1										
ツグミ						21		1	○					
オオヨシキリ										5				
セッカ		3							○	6			3	1
ホオジロ		1	2	1				2	○	4			2	1
カワラヒワ			5						2	1			1	
スズメ		37	101	70		46		2	○	15			8	
ムクドリ		6		14		76		4	○	5			5	
ハシボソガラス		6	35	125		9		18	○	7			5	4
ハシブトガラス								1						2



鈴鹿川および鈴鹿川派川河口調査

鈴鹿川河口右岸先端、右岸磯津橋より250m下流の磯津北町バス停付近、吉崎海岸北端灯台付近、派川右岸突堤の根元、および派川右岸先端の5地点で約30分ずつ定点観察をおこなった。

鈴鹿川河口特に本川河口は季節により、休日は人が非常に多いこともあり、そんな時には鳥達は派川に集まる。一年を通じてどこかで工事を行っている。磯津漁港南側の養魚池は徐々に埋め立てられつつあり、カモ類も以前に比べ少なくなっているようである。(表は24、および25ページ)

(調査：濱中明代・鹿島素子)

野鳥記録(抜粋)2006年

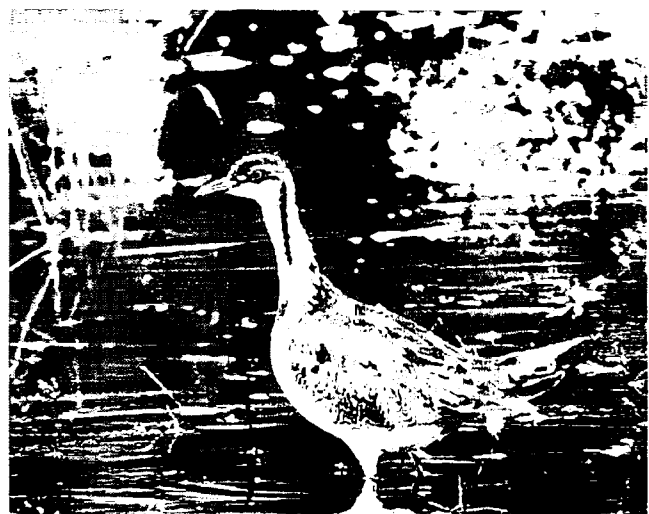
(受付順>記録順)

種名	個体数	観察日	場所	(通称)	備考・メモ	報告者
エリマキシギ	4	9月3日	南牟婁郡御浜町市木			中井節二
ヘラシギ	1	9月22日	津市栗真町屋町	町屋浦		池村 元
ツメナガセキレイ	5	9月25日	南牟婁郡御浜町下市木		その他記録あり	中井節二
ミュビシギ	271	9月23日	津市栗真町屋町	町屋浦	今期最大数	平井正志
クロジョウビタキ	1	10月22日	熊野市金山町		♀	中井節二
レンカク	1	10月31日	松阪市伊勢寺町	ベルファーム 四郷池		太田幸男
ナベヅル	4	11月22日	伊勢市西豊浜町			小坂里香
ハギマンコ	10	12月3日	松阪市飯南町	相津峠		中西章



上:クロジョウビタキ、中井節夫撮影
右:レンカク 中西 章撮影

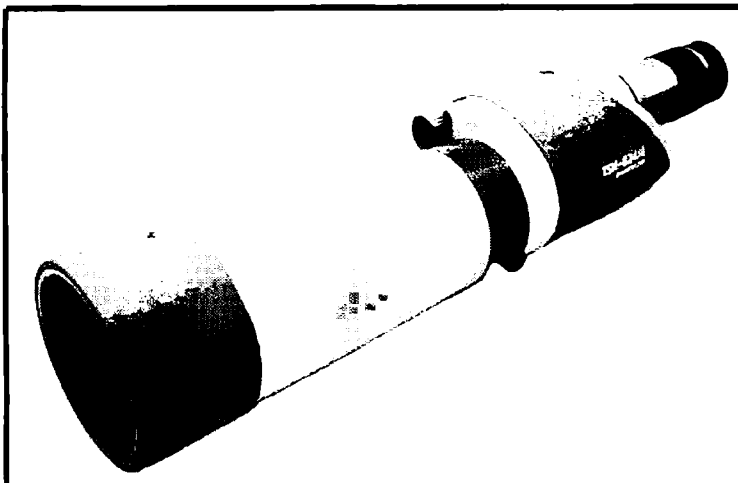
お詫び: 52号野鳥記録のオオアジサシの写真は今井光昌さんの撮影したものでした。お詫びして訂正いたします。(編集部)



野鳥記録



上：ナベヅル、小坂里香撮影
右：ヘラシギ、今井光昌撮影



取扱商品

フィールドスコープ
双眼鏡(小型・大型)
天体望遠鏡
カメラ(新品・中古)
その他光学製品各種

取扱メーカー

KOWA・NIKON・FUJINON
MIYAUCHI・VIXEN・PENTAX他

中部地区最大の光学製品専門店

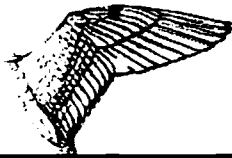
TELESCOPE CENTER EYEBELL

テレスコープセンターアイベル (株式会社アイベル)

〒514-0801 津市船頭町3412(メガネのマスター2F) TEL 059-228-4119

定休日/毎週水曜日 営業時間/10:00~19:00

ホームページ <http://www.eyebell.com> メールアドレス eyebell@diamond.broba.cc



理事会報告

事務局

第2回（2006年11月12日）出席者10名

○ホームページへの掲載内容について

現行のホームページ管理用メーリングリストを使って審議を行う。

結果、支部長・副支部長・各部長・事務局長・HP管理者の過半数の承認をもって掲載是とする。

○調査費について

次年度より、理事会で「委託契約終了後も継続して調査が必要である」と認めたものを対象に、支部から調査費を支払うこととする。なお、対象となった調査についてはつぎに行う。また、支払い金額は、該当時期までに事務局が中心となり検討・決定していく。

・担当者は、予め「年間計画書」を提出し理事会で承認を得る。（予算化のため）

・対象調査については、「調査結果報告（中間報告を含む）」を支部に提出する。

○中部ブロック会議報告

10月8日～9日、愛知県で開催、杉浦支部長、市川副支部長が参加。他支部は出席が多かった。来年は石川県にて開催の予定。

○支部体制について

杉浦支部長から、鳥羽風力発電計画地保護問題にからみ支部運営を混乱させた責任と、すでに自分の住所を愛知県に移している、との2つの理由を挙げ辞意の表明があった。

2007年の総会まで、支部長代理に平井理事が就任する。

(保護部)

○風力発電シンポジウム

11月4日東京において「(財)日本野鳥の会」主催で行われ、当支部から平井・近藤両理事が参加した。

○ラムサール市民の会

10月28日、東京において開催された。「ラムサール条約登録湿地を広げよう」との会であり、三重県からは、「五主～豊津浦一体の海岸線」を新たな候補地として提案した。他地域では、渥美表浜・三番瀬・和白干潟・汐川干潟などが候補に挙げられている。

支部活動の記録（9月～11月）

9/ シギ・チドリ類調査（研究部）

9/5 密猟対策のため県・警察との三者合同パトロール（南勢地区）

9/22 県津庁舎へ「環境調査委託」調査結果報告書の検査

10/7 支部報「しろちどり52号」発行・発送作業

10/8～9 中部ブロック会議 支部長・副支部長が参加

10/9 保護部会議・鳥羽タカの渡り調査

10/30 事務局会議

11/4 「風力発電施設が鳥類に与える影響に関する国際シンポジウム」へ
保護部長ら2名参加

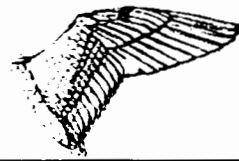
11/12 2006年度第2回理事会

●これからの予定（12月～）

12/ カワウ生息委託調査

1/13,14 ガンカモ類委託調査

しろちどり53号



密猟パトロール報告書

報告者 竹林 康

実施日： 2006年9月5日（火）晴れ
参加者：伊勢警察署生活安全課 2名
県農林水産商工環境事務所森林保全課 2名
県鳥獣保護員 2名
日本野鳥の会三重県支部 2名（竹林 康・高木和夫）

午前6時伊勢庁舎前より出発、鍛冶屋峠、床の木峠、剣峠のコースで行く。鍛冶屋峠へ入る。密猟者には出会わず支部取り付けポスター一箇所引き剥がしあり。新しくとりつける。床木峠へ入る。密猟者には出会わないが、最近密猟したらしき形跡あり。ここでも一箇所ポスター引き剥がしあり。新しく付ける。剣峠においても密猟者には出会わず。ポスター引き剥がし一箇所あり、新しくポスターをつける。途中ヤマドリ2羽、ウリボー（猪）3匹猿等を見る。

密猟取り締まりも大切だが同時に森林へのゴミ投棄が昨年よりふえている。自然保護の立場より、なんとかしなければならぬと思う。9時40分伊勢庁舎に帰着、密猟パトロールを終わる。

探鳥会報告 2006年7月～2006年10月

カワウ (30)、ササゴイ (1)、ダイサギ (4)、コサギ (8)、アオサギ (3)、イソシギ (2)、ソリハシシギ (2)、ウミネコ (135)、キジバト (2)、ツバメ (6)、ハクセキレイ (9)、ヒヨドリ (2)、イソヒヨドリ (3)、スズメ (1)、ムクドリ (5)、ハシボソガラス (30+)。16種

●木曾岬干拓地探鳥会

2006年7月23日（日） 9:00-12:00
（共催団体 愛知県野鳥保護連絡協議会）
三重県木曾岬干拓地・愛知県鍋田干拓地
近藤義孝・村田芳雄 参加者14名

カワウ (30)、ダイサギ (4)、チュウサギ (3)、コサギ (13)、アオサギ (7)、カルガモ (20)、ミサゴ (3)、チュウヒ (2)、キジ (15)、コチドリ (2)、ケリ (10)、コアジサシ (1)、キジバト (10)、カワセミ (4)、ヒバリ (10)、ツバメ (30)、ヒヨドリ (4)、モズ (1)、オオヨシキリ (1)、セッカ (20)、ホオジロ (9)、カワラヒワ (10)、スズメ (20)、ムクドリ (50)、ハシボソガラス (45)、ハシブトガラス (15)、ドバト (50)。27種

チュウヒの餌渡しを確認できた。雄が2度、餌をおろしていった。

残暑きびしい日となり潮干狩、レジャーボート客でにぎわっていた。京都支部から3名の方が参加していただき交流をしながらの探鳥会であった。折角遠方から参加してもらったのに鳥類の種類が少なくてとは心配していたが、最終的には16種を観察することが出来た。海岸には体長1.5mのスナメリが打ち上げられていた。死後数日は経過していると思われる。

●高松海岸の野鳥探鳥会

2006年8月20日（日） 10:00-12:00

川越町高松 高松海岸
市川雄二・高 和義

9名（会員4名 会員外5名）



カンムリカイツブリ

しろちどり53号



探鳥会報告

●木曾岬干拓地探鳥会

2006年8月27日(日) 9:00-12:00

(共催団体 愛知県野鳥保護連絡協議会)

三重県木曾岬干拓地・愛知県鍋田干拓地

近藤義孝・村田芳雄 参加者12名

カイツブリ(4)、カワウ(50)、ゴイサギ(4)、アマサギ(60)、ダイサギ(6)、チュウサギ(10)、コサギ(10)、アオサギ(1)、カルガモ(55)、キンクロハジロ(1)、ミサゴ(4)、チュウヒ(1)、ハヤブサ(1)、キジ(1)、コチドリ(6)、ケリ(15)、ヒバリシギ(1)、クサシギ(6)、イソシギ(6)、キジバト(3)、カワセミ(4)、ヒバリ(5)、ショウドウツバメ(10)、ツバメ(20)、ハクセキレイ(10)、ヒヨドリ(2)、モズ(2)、オオヨシキリ(1)、セッカ(10)、カワラヒワ(20)、スズメ(100)、ムクドリ(15)、ハシボソガラス(40)、ハシブトガラス(20)、ドバト(80)。35種

チュウヒの今年巣立った幼鳥が鍋田干拓地へ出てきていた。今年、巣立つ事が出来たのは1羽だけのようなのだ。

●ツバメのねぐら入り探鳥会

2006年8月27日(日) 18:00-19:00

桑名市多度町掛斐川右岸堤

横山真一・近藤義孝

参加者12名(会員10名 会員外2名)

ゴイサギ、ダイサギ、カルガモ、ツバメ、スズメ、ハシボソガラス。6種

天候が曇りだったので現地に着いた18時20分頃にはすでにツバメが集まり始めていた。日没が近づくにつれてツバメの数は徐々に増え、周りにはツバメだらけになって総数2万羽を越えると想定される。18時50分には全て眼前の芦原に入り終えたので驚かせないように早めに切り上げた。



オオジュリン

しろちどり53号

●雲出川河口探鳥会

2006年9月16(土) 9:30-11:00

松阪市五主町雲出川河口

西浦克征・石原 宏

25名(会員18名 会員外7名)

カワウ、ダイサギ、コサギ、アオサギ、ミサゴ、シロチドリ、メダイチドリ、トウネン、ハマシギ、ミュビシギ、キアシシギ、ソリハシギ、チュウシャクシギ、セグロカモメ、ウミネコ、ツバメ、ハクセキレイ、イソヒヨドリ、セッカ、ハシボソガラス。20種

シギ、チドリに関しては比較的初心者の方が多かったが、代表的なシギ、チドリの実物大の模型を使つての説明や干潟の重要性(カイトボードの影響含む)などについての話で理解を深めていただいた。

ただ、大型のシギがいなかったことや途中で雨模様となり、早めに切り上げたことで、消化不良の感がある。

●木曾岬干拓地探鳥会

2006年9月24(日) 9:00-12:00

(共催団体 愛知県野鳥保護連絡協議会)

三重県木曾岬干拓地・愛知県鍋田干拓地

近藤義孝・村田芳雄 参加者16名

カイツブリ(5)、カワウ(4000)、ゴイサギ(2)、アマサギ(8)、ダイサギ(8)、チュウサギ(15)、コサギ(7)、アオサギ(6)、カルガモ(30)、コガモ(11)、ミサゴ(7)、トビ(2)、オオタカ(1)、ノスリ(1)、ハヤブサ(1)、チョウゲンボウ(1)、キジ(1)、コチドリ(4)、ケリ(1)、クサシギ(5)、イソシギ(2)、キジバト(10)、カワセミ(6)、ヒバリ(15)、ショウドウツバメ(1000)、ツバメ(10)、ハクセキレイ(5)、ヒヨドリ(7)、モズ(4)、ノビタキ(4)、ウグイス(1)、セッカ(2)、コサメビタキ(1)、スズメ(50)、ムクドリ(10)、ハシボソガラス(30)、ハシブトガラス(20)、ドバト(150)。38種
秋の渡りのシーズンで、猛禽類も沢山観察できた。残念ながら、チュウヒは見る事が出来なかった。

●海蔵川探鳥会

2006年9月26日(火) 9:40-12:00

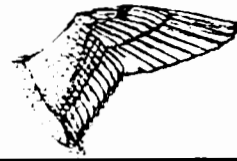
四日市市西坂部町

尾畑玲子・高 和義

12名(会員6名 会員外6名)

カイツブリ(3)、カワウ(4)、ゴイサギ(8)、アマサギ

探鳥会報告



(5)、チュウサギ(13)、コサギ(1)、アオサギ(2)、カルガモ(25)、コガモ(1)、オオタカ(1)、バン(2)、イソシギ(1)、キジバト(2)、カワセミ(2)、ヒバリ(1)、ツバメ(5)、キセキレイ(2)、ハクセキレイ(3)、セグロセキレイ(1)、ヒヨドリ(5)、モズ(5)、ホオジロ(10)、カワラヒワ(6)、スズメ(18)、ムクドリ(50)、ハシボソガラス(2)、ハシブトガラス(1)、ドバト(1)。

28種

心配だった天気は、よいほうに外れ、暑からず寒からず気持ちのよい日となった。NHKの取材に張りきってくれたのか、オオタカ、カワセミなど当探鳥会のヒーロー(ヒロイン?)も登場したが、期待のコシアカツバメやショウドウツバメなどの渡り鳥には会えなかった。

●多度山 タカ渡り探鳥会

2006年9月30日(土) 9:00-12:00

桑名市多度山山麓

近藤義孝・加藤光弘 17名

アマサギ、コサギ、アオサギ、ミサゴ、ハチクマ、トビ、キジバト、ショウドウツバメ、ツバメ、ヒヨドリ、エナガ、ヤマガラ、シジュウカラ、メジロ、ホオジロ、カケス、ハシボソガラス。 17種

晴天が何日も続いた後で、ほとんどタカの渡りは見られなかった。

カケスがたくさん渡りをしているのを、観察することが出来た。

●鳥羽 タカ渡り探鳥会

2006年9月30日(土) 6:00-9:00

鳥羽市行者山周辺

林 淳子・西村 泉

参加者25名(会員14名 会員外11名)

カワウ、アオサギ、カルガモ、ミサゴ、トビ、ハイタカsp、クイナ、イソシギ、キジバト、ホトトギスsp、カワセミ、ツバメ、ハクセキレイ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、モズ、ノビタキ、イソヒヨドリ、メジロ、ホオジロ、スズメ、ムクドリ、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ドバト。 25種

風力発電建設計画のある行者山周辺での探鳥会。雨模様の曇空の下での開催となり、タカの渡りは見られませんでした。地元の方の参加が多数あり、出現した鳥の種類も多く、「身近にこんなに多くの野鳥が観察されるなんて」「これからの散策が楽しみ」との声もあり、特にカワセミの出現は皆さんの心を一層捉えたようでした。

●高見峠 秋のタカ渡り探鳥会

2006年10月1日(日)

松阪市飯高町と奈良県東吉野村県境 高見峠

田中豊成・小林達也

雨天のため中止

●相津峠 タカ渡り探鳥会

2006年10月1日(日)

松阪市飯南町 相津峠付近

中西 章・西村四郎

雨天のため中止

●白塚・町屋海岸探鳥会

2006年10月8日(日) 10:00-12:00

津市白塚町町屋海岸

石原 宏・橋本富三

参加者11名(会員9名 会員外2名)

カワウ、ダイサギ、シロチドリ(約30)、ミユビシギ(約200)、ユリカモメ、ウミネコ、ヒバリ、セグロセキレイ、イソヒヨドリ、ホオジロ、スズメ、ハシボソガラス。

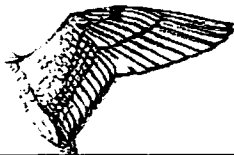
12種

予想通りに渡り途中のミユビシギが200羽程見

られ、特に大潮だったので昼前の干潮時には、波打ち際でのエサ取りの様子まで観察できて全員が満足できた観察会となった。正午から参加者のうち9人が、昼食を挟んで意見交換会を実施した。



ホソバハマアカザ



探鳥会報告・お知らせ・編集後記

●木曾岬干拓地探鳥会

2006年10月22日(日) 9:00-12:00

(共催団体 愛知県野鳥保護連絡協議会)

三重県木曾岬干拓地・愛知県鍋田干拓地

近藤義孝・村田芳雄 参加者19名

カイツブリ(6)、カワウ(30)、ダイサギ(2)、コサギ(5)、アオサギ(4)、マガモ(4)、カルガモ(200)、コガモ(140)、ヒドリガモ(4)、ハシビロガモ(2)、ミサゴ(3)、トビ(1)、オオタカ(1)、ノスリ(4)、チュウヒ(2)、ハヤブサ(1)、チョウゲンボウ(1)、キジ(2)、コチドリ(5)、クサシギ(8)、タカブシギ(1)、イソシギ(6)、タシギ(4)、キジバト(5)、カワセミ(3)、アリスイ(1)、ヒバリ(20)、ショウドウツバメ(20)、キセキレイ(1)、ハクセキレイ(16)、ヒヨドリ(40)、モズ(12)、ジョウビタキ(1)、ノビタキ(3)、ヤマガラ(3)、カワラヒワ(6)、スズメ(150)、ムクドリ(40)、ハシボソガラス(30)、ハシブトガラス(30)、ドバト(14)。41種

猛禽類のオンパレードに、アリスイが木曾岬干拓地の中に現れた。

これからの木曾岬・鍋田は沢山の鳥類が観察できる。

●二つ池探鳥会

2006年10月29日(日) 9:30-11:30

伊勢市黒瀬町 二ツ池

竹林 康・中西 章

参加者12名(会員12名)

カイツブリ(4)、カワウ(100)、アオサギ(8)、オシドリ(1)、マガモ(5)、カルガモ(12)、コガモ(4)、ハシビロガモ(6)、キンクロハジロ(2)、ミサゴ(1)、オオタカ(1)、キジバト(1)、カワセミ(1)、コゲラ(1)、ヒヨドリ(5)、モズ(1)、エナガ(2)、メジロ(1)、ムクドリ(1)、ハシボソガラス(1)。

20種

編集後記

今回の特集記事は、会員の方による海外の鳥ウォッチングである。珍しい鳥や美しい鳥が群舞する様子を目の当たりに見られるなど、編集子には羨ましい限りである。せめて不思議の国のアリスに連れられて、南海の孤島で生きているドーデーを発見するという初夢を見てみたいものだ。(TH)

手軽に写真撮影ができるデジスコを使っての観察会を主題にしてみた。

記録写真を今風にデジカメとスコープを使ってすることでもっと若い人達の参加を得ることが出来ないかとの思いで行った探鳥会であったのだが、やはり思うようには行かなかった。場所の選定ももう少し考えて決めるべきであった。昨年にくらべると少しカモの入りも遅い感じがする。

編集部よりお知らせ

編集部では支部報「しろちどり」の原稿を随時募集しています。鳥、自然、あるいは支部の活動について、文章でも写真でもイラストでも結構です。およせください。イラストや写真でまとめたものはアートギャラリーとして掲載します。イラストはカットとして使用しますが、表紙にさせていただく場合もあります。またすぐれた写真やイラストは年に1回くらいはカラー印刷を考えています。文章は連載でも結構ですので、編集部にご相談ください。また野鳥記録も募集しています。

原稿はなるべく電子ファイルでお願いします。

原稿送付先 津市安濃町田端上野

910-49 平井正志

mv-hirai@poem.ocn.ne.jp

しろちどり 53号

2007年1月10日発行

題字： 濱田 稔

表紙絵： 鹿島素子

カット： 川口久美・平井正志

編集： 平井正志 514-2325

津市安濃町田端上野 910-49

発行所： 日本野鳥の会三重県支部

平井正志方

514-2325 津市安濃町田端上野 910-49

<http://www.amigo2.ne.jp/~miebirds/>

印刷：伊藤印刷株式会社